

図表17 被保護世帯数と内訳

	被保護世帯数	母子世帯	その他世帯	母子世帯割合	その他世帯割合
1995年	2,969	(572)	(154)	19.3%	5.2%
1996年	2,703	(534)	(158)	19.8%	5.8%
1997年	2,817	(510)	(168)	18.1%	6.0%
1998年	3,061	(536)	(198)	17.5%	6.5%
1999年	3,270	(581)	(204)	17.8%	6.2%
2000年	3,453	(607)	(227)	17.6%	6.6%
2001年	3,702	(641)	(265)	17.3%	7.2%
2002年	4,067	(708)	(326)	17.4%	8.0%
2003年	4,418	(791)	(362)	17.9%	8.2%
2004年	4,661	(831)	(350)	17.8%	7.5%
2005年	4,953	(866)	(387)	17.5%	7.8%
2006年	5,232	(891)	(471)	17.0%	9.0%
2007年	5,395	(908)	(510)	16.8%	9.5%
2008年	5,581	(907)	(537)	16.3%	9.6%
2009年	5,940	(909)	(657)	15.3%	11.1%
2010年	6,114	(897)	(721)	14.7%	11.8%

(福祉事務所資料より作成)

図表18 就労決定者数推移と内訳

	就労決定者数	母子世帯	母子世帯世帯員	その他	その他世帯員
2006年	40	23	0	13	1
2007年	106	40	2	21	13
2008年	87	49	3	18	11
2009年	66	34	0	21	7

(福祉事務所資料より作成)

「生活支援・社会参加」型自立支援プログラム参加者の 聞き取り調査報告（釧路市）

中園 桐代

【要約】

本稿は、釧路市における「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラム参加者の聞き取り調査の一次分析結果報告である。「社会生活自立」と「日常生活自立」の回復を基盤にすえた長期的な「就労自立」を支援する釧路市の自立支援プログラムは全国的な注目を集めている。①生い立ち、②生活保護を受給するまでの経緯、③就労について、④その他、の4点にわたり、5名の参加者（元参加者を含む）に半構造化インタビューを実施した。

1 問題の所在

本稿は、釧路市における「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラム参加者の聞き取り調査の一次分析結果報告である。同市では、釧路市の取り組みを参考に、「社会生活自立」と「日常生活自立」の回復を基盤にすえた長期的な「就労自立」を支援する取り組みを行っている。

生活保護行政の現場には、「被保護世帯が安定した生活を再建し、地域社会への参加や労働市場への「再挑戦」を可能とするための「バネ」としての働きをもたせることが特に重要であるという視点である」（厚生労働省『生活保護制度の在り方に関する専門委員会報告書』2004年12月）。

同報告書では、「就労による経済的自立のための支援（就労自立支援）のみならず、そ

れぞれの被保護者の能力やその抱える問題に応じ、身体や精神立を支援する取り組みに注目が集まっている（以下、「生活支援・社会参加型」自立支援プログラムと呼ぶ）。

こうした「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムの嚆矢が、釧路市である。

2 方法

釧路市生活福祉事務所の課長に、調査の趣旨を説明し、5名のプログラム参加者を紹介してもらった。面接は、中園が単独で行った。

半構造化インタビュー法で行った。事前に用意した柱は、①生活史・職歴、②自立支援プログラムについて、③就労について、④その他、の4点である。なお、調査協力者の名前はすべて仮名である。

3 結果

3-1 市原さん

(仮名・45歳・男性・ウツで月1回通院中)

①生活史・職歴

市原さんは、18歳で長崎の水産高校卒業後、漁船に28歳まで乗っていたが、漁獲量減り生活できなくなった。釧路の船の仕事を4年くらい、シーグレース号やタグボートに乗る。この頃結婚。元妻が不定期な仕事なので育児ができないというので辞める。

32歳～35歳の頃、建設会社に就職。解体業。冬に仕事なくなるので、通年の仕事があったくて、住宅関連の企業に転職した。

7年前(38歳)、長男を医療事故で亡くした。職場で社長と諍い、うつ病を発症し、引きこもり生活を送るようになった。自殺未遂もしたという。

その後、土木設備の会社に再就職、建物の中のセントラルヒーティングの配管、1年間修行した。

40歳の頃、求職活動をしていて、ハローワークは無理なので、前の社長にお願いしていたが、焦りがあった。上の子が中学に入学してお金が足りない、何とかしたい、お金貯めないという焦りがあった。同時に下の子が吹奏楽部で函館に行く旅費が必要。気持的に辛くなって病院に10日入院した。

その後、離婚。妻にDVの訴えをされて子どもに会いに行けない。運動会も遠くから見ただけ。離婚後、生活保護受ける。

②自立支援プログラムについて

43歳入院している時に看護師と話しをして、介護の仕事で男性が必要と言われた。ケースワーカーに相談して、試しにボランティ

アに行って「様子を見て」「気が変わらないならいい」と言われて、2年前にケアコートひまわりにボランティアに行った。1年間はボランティアだけだった。

資格は移動教室で2週間で取得した。その後自費で、介護事務、福祉用具相談員、住環境コーディネーター、サービス介護士2級、点字。ケアマネージャーの資格もとりたい。

介護事務は自分が包括支援センターに通っている時にお年寄りに相談されて、分からなくて、取った。住環境コーディネーターは建設や住宅の仕事をしていたから、アドバイスできる、修理方法が分かる。

③就労について

44歳の6月にパートで就職、ボランティアとパート労働両方かけもちしている。

午前中はボランティア、午後からパート。パートは月に17～20日、4週6休。金曜日や人手がない時に自発的にボランティアで入るので休みがない。デイケアには毎日出ている。デイケアに来ている人が、そのまま2階のショートステイに上がってくると、上のスタッフは利用者のことをよくわからない。また、お年寄りによっては、人見知り等で不安を感じる人もいる。職員にはもう仕送りするが、自分が一緒に行くことで情報が上乗せできるという。

しかし、ボランティアでは出来ないことがあるから流れが止まる。車いすからソファへの移動はパートは出来るがボランティアはだめ。それが歯がゆいという。

3年後、介護福祉士取れたら取りたい。今後ボランティアが増えるかもしれない。ひまわりと勤医協でPC教室。最終的にはひまわりの中でパソコンの作り方を教えたい。パソ

コン(マイクロソフト)の資格を持っている。利用者のADLのグラフを作りたい。

パートのシフトは変則。デイケアは1日4時間45分。入浴介助は3時間。2月の実働は18日。2日が入力で16日が入所。休みは10日だが、ボランティアに行くと休みは1日だけ。休みは週1日あるかないか、ほとんど毎日行く。

入所のパートは3時間はフロアにいて、1時間は先取りや段取り。目も見て確かめる、自分の目で確認の方がいい。

昨日は9時半から6時までいた。午前中はボランティアで13時半から16時半が入所棟の入浴。入浴の残業もあった。デイケアの方からも応援に来てもらって、分かりやすい人は担当してもらおう。早出しの人は間に合うようにする。決まりと臨機応変。

働いている時に車いすのチェックをしておいて、休みの日に直す。ずっとそのままにしておきたくない。職員の人は忙しくて、車いすに空気いれる時間もない。用務員のひともし忙しい。

ケースワーカーは、ヘルパーを取った後何もない。具合どう、仕事続けられているか。小林さんには1、2回しか会ってない。12月はボーナスが出るので自分で保護費計算して、アパートの更新料も自分で用意した。

2～3年後介護福祉士を取るのが目標。疑問は調べる。後は賃金の折り合いと職員の空きの問題。利用者さんが快適なら良い。

歩きと自転車で通っている。車をケースワーカーが認めない。通勤に使いたい。でも免許の最習得が必要。仕事の幅が広がる。ケアマネは車ないと。免許再復帰しないと。

3-2 新見さん

(仮名・女性、訪問介護で就労)

①生活史・職歴

新見さんは、羅臼出身、中卒、母がいなかったため家事全般を幼いながらに担っていた。また、観光の時期は食堂でアルバイトもしていた。

平成15、16年頃に離婚(釧路)、17年に生活保護を受ける。

平成18夏に名古屋に派遣で働きに行く。下の子だけ一緒。上の子は厚岸水産の療に残る。レトルトのパックを造る工場。暑さで体調を崩し、秋には釧路に戻る。白糠コープでレジうち(派遣)開始。平成19年、春から大人の障がい者のグループホームで朝夕の食事したく(ダブルワーク)していた。食事に用意の仕事は人間関係でやめて、白糠学園(肢体不自由児療護施設)の給食の仕事(夏から平成20年4月まで)をしていた。白糠学園から厚岸病院に移ってほしいと言われて、通勤が無理なので辞める。この年夏に長男は世帯分離、グループホームでアルバイトとして働いている。

平成20年 春に保険の勧誘を始める。3ヶ月は給与固定なのでいいが、その後歩合。暮れに4万円しかなくなる。アパートの大家さんに保護受けたらと勧められた。しかし、仕事は辞められず、部長にいつか平成21年2月に辞める。

平成21年 仕事辞めて保護を受ける。秋から医師会病院でヘルパー(委託派遣)として働き、22年 医師会病院閉鎖で失職。同9月に技術専門学院で資格取得。7月に知的障がい者の施設の臨時で働くが、足の調子が悪くなる。車の手配がついて12月からソングの派遣ヘルパーで働く。

②自立支援プログラムについて

新見さんは、自立支援プログラムは知っていたら行きたかったという。ただ、支援プログラムを受けたとしても、採用試験等は一緒に行なわれるので、

今ひとつ。今、ソングで働いているのも、学校出ではないが病院ヘルパーとして働いていた経験があったから。

ケースワーカーは親切に相談に乗ってくれた。担当のケースワーカーは介護のこと分かってくれて、資格を取ることに賛成してくれた。ただ、時期が待ってくれと言われて、釧路高等技術専門学院のビジネス介護科に通った。就労支援員とはよく話す。自立支援員とは話ししない。

③就労について

今の職はパート扱いなので月10万円くらい。ただ、子どもが柔道をやっているのので、全道大会の費用が大変だという。子どもが不登校になったときは大変だった。学校の先生が支援してくれた。

3-3 佐田さん（仮名・36歳・男性・

リサイクル企業で就労中）

①生活史・職歴

白糠高校中退。若い頃は正社員で働いた。ホテルや飲食店。調理しになりたかったが、親が調理師学校の費用を出してくれなかった。5年くらい努めたところもある。

平成22年12月に仕事がなくなって生活保護の受給を開始した。平成16～17年、派遣やアルバイトで引越しや水産の仕事に従事した。平成20年12～4月は保護を受ける平成20年6月から内地で道路工事。20万円

くらいは稼げる。平成20年春から派遣で道路の建設、切られる。実家で生活していたが、22年5月に保護申請。実家を出る。

②自立支援プログラム

自立支援プログラムへのボランティア参加の話は自立支援員さんから聞いて、自分で書いて出した。

公園ボランティアに行きたかったが、ビゲンワークはどうと言われて書いて出した。励みになった。週2回、月木8～11月。気分転換、気晴らしは事実。病院に通ったが、自分じゃないような感じで嫌だった。気持ち次第で変えられる。家にいるとウツや不眠症になってしまう。不眠症で薬も飲んでしたが、ボランティアに自分が嫌だったので参加するようにした。家にいても前に進まない。ビゲンワークに行くとコミュニケーションとふれあいがある。自分も輪の中に入っているようになった。

最初はいろいろ分からないから不安はあった。ずっと家にいても変わらない。仕事は充実する。

②就労について

雨が降ろうが雪が降ろうが、アルバイトは通年で仕事をする。11月までボランティア12月からはアルバイト。最初からやるのがつらい、大変（30歳を超えて新人である）。しかし、長く勤めたい。

仕事内容はボランティアと変わらないが、ペースを早くそれなりにこなす。お金もらっているんだから、雇うからには、他の人に合わせる。8～17時、昼1時間休み、10時と3時に30分休み。雇用、労災保険はある。健康保険、年金は生保で免除。国の人が助け

てくれる。

給与は手取りで10万くらい。安定していれば、正社員を大変だけど目指したい。ケースワーカーから仕事をするように言われて、ハローワークにいったら、偶然ビゲンワークの求人を見つけて面接を受けた。ボランティアをしながらハローワークに通っていた。家の近くで探したかった。車はまだ先になりそう。仕事先のビゲンワークまでは片道1時間くらい。

難しいのを努力してやりこなしている。甘くない会社だとは分かっていた。我慢してでも、仕事した。怪我して血が出ても。今のところは期限は言われていない。6ヶ月。夏くらいまで。

正社員は難しい。生活保護をもらっていること自体甘えていると会社に入る時言われた。重機の免許は取りたい。雇用保険でポリテクセンターに行きたい。

生きるということの難しさを感じた。仕事がないと生活できない、惨めな想いをする。

3-4 四谷さん（仮名・女性、介護職で働いているが近々辞める予定）

①生活史・職歴

湖陵高校の定時制を卒業後事務で働く。在学中は事務、レストランでのバイトを童心の奨学生を続けながら働いた。卒業後は本田技研鉏路出張所の事務で20～22歳働く、結婚退職した。結婚後は新聞配達、ベッドメイクの仕事を経てフクハラに勤める。パート募集のチラシを見て、ママ友と一緒に応募した。生活保護を受ける前は、平成十年から19年までスーパーでフルタイムパートとして働いていた。最初は鮮魚コーナーで刺身を作る仕事だったが時間が短いので、一般食品担当

に移った。発注仕入れ、ディスプレイ等であり、社会保険もついていた。しかしながら膝鞘炎を患い仕事を辞める。

②自立支援プログラム

ボランティアは「わたすげ」に2ヶ月、週1回行った。CWに出来そうときかれて、ボランティアで様子を見て訓練に行った。

資格はあっていいと思っていた。友人も介護職で働いている。腰が大丈夫なら続けて行きたい。

③就労について

平成22年4月から就職支援基金でホームヘルパー2級を3ヶ月かけて取得した。その後市役所の就業相談員に「介護で良いところがある」と言われて、有料老人ホームに就職した。そこの仕事内容等詳しいことは全く説明されなくて、押しつけと感じた。ヘルパー2級を取って、どういうところで働きたいか聞いてほしかった。

老人ホームは夜間、昼間の勤務の交代がなく夜間だけの勤務だった。就業支援員の紹介だったので断れなかった。

最初は昼間の勤務だったが、夜間に回されて4日勤務、1日休んで3日勤務した後、まっすぐ歩けなくなった。体調不良のため辞めたいと申し出たが、自分の替りを探してくれと言われて1ヶ月半後に辞めた。

辞めたことによってCWが相談員との折りが悪くなり、自分で次の就職先を探した。ニチイの訓練を受けたので、ニチイの関連の事業所に再就職した。そこは夜勤と日勤の交代勤務なのでつらくはないが、腰を悪くして今月いっぱい辞める予定である。1日十人の入浴の介助があり、それがつらい。

グループホームの求人はあるが、評判が悪かったり若い人しか取らなかったり、求人条件と噛み合ない。また、高校の同級生に看護助手の空きがないか聞いてもらっている。面接にいて年齢を理由に落とされたこともある。

デイサービスは労働時間が短く身体は楽だが自立できないから条件に合わない。

3-5 後藤さん

(仮名・男性、NPO正規職員)

①生活史・職歴

10年前札幌にいたが姉が釧路で入院後退院して介護が必要になり、独身だったので釧路に来た。自分は社会人の啓発プログラムを行なう会社を運営してたので、社員に頼んで釧路に来た。最初は短期の予定だったが、資金がショートし市役所に相談に行った。姉は持ち家だったので保護を受けられなかった。6年前、1年後自分が吐血して、病院に行くお金もなく再び相談した。ケースワーカーCWにアパートで下宿での独居を勧められ、保護を受けて病院へ行った。病気は良くなった。ストレス、お金のことが原因で食道の潰瘍だった。病院に行ってからはずぐ良くなった、精神的にも良くなった。

保護を受ける前は、生活保護は使いたくない、自分に縁がない、受けてはいけないという感じだった。3ヶ月くらいから精神科のお医者さんのところで働いた。女医さんの託児所を開く計画だったが上手くいかず。

②自立支援プログラムについて

就職活動を始めたが、なかなか決まらない。その中で自立支援プログラムが始まり、お姉

さんは入院していたので、10時から3時なら出られるので応募した。新田さんからの文書が来て、おおぞらネットワークの作業所の手伝いに行った。気晴らしになった。アンケートで感想に「子どもが好き」と書いたので、スクラムが始まった時に新田さんから声がかかった。それが4年前の12月6日。

はじめは子どもが怖かった。荒れる学校のイメージがあつて。2～3日経つと普通の子どもだと分かった。自分の違和感なくなり自然体で接するようになった。

子どもたちが使いやすいカリキュラムを開発するのが仕事である。例えば理科だったら、原理や定理から思考を組み立てるといような一体感のあるカリキュラム。

③就労について

ボランティアに行つて2年後パートで冬月荘に雇用された。1日5～6時間勤務で6日勤務。月8～10万円の賃金なので、控除をして保護を受けていた。医療費のみの免除を受けていたような形。平成22年5月からNPO法人「地域生活ネットワーク」の「まじくる」担当の正社員として雇用されるようになり、保護は切った。社会保険もある。

イギリスの就労自立支援調査報告（第一報）

中園 桐代

【要約】

本稿は、イギリスにおける生活困窮者の就労自立を促す成人基礎教育実践の調査報告である。公的職業安定所「ジョブセンター・プラス」、ホームレスの自立支援施設「セントマンゴー」、多角経営型の就労支援に取り組む社会的企業「ツイン」の活動について明らかにする。今回紹介しきれなかったものは次年度に掲載する。

はじめに

欧米では、就労自立の問題は、成人基礎教育として実践的にも研究的にも蓄積がある。本科研では、海外の蓄積にも学びつつ、その視座と方法を集積していく作業を進めている。これまで、ドイツやデンマークにおける生産学校の実践を報告したが、今回は、イギリスの社会的企業による実践に着目した。

その理由の一つは、わが国の研究者仲間からイギリスは、公的職業安定所において、丁寧なカウンセリングと手厚い就労自立を行っているとの情報を耳にしたからである。わが国でも、厚労省が示したハローワークとの連携した自立支援施策が全国に普及しつつあるが、制度的にも実践的にも、その内実は精査される段階にある。その意味において、イギリスの蓄積に学ぶ意義は大きい。

二つには、就労自立分野における社会的企業の活躍である。わが国でも、「新しい公共」のあり方が問われるなかで、NPOの台頭がめざましい。そうした中で、企業体としての

財政的な安定性を確保しつつ、実験的で創造的な社会サービスを提供する日本版・社会的企業と呼び得るものもみられはじめています。たとえば、釧路市のNPO法人「地域生活ネットワークサロン」のように年間事業高4億強、スタッフを100名以上雇用し、モデル事業を多彩に展開しつつ、制度づくりにも寄与している。

今回、イギリス社会的企業への訪問調査により、①支援実践の視座や方法の収集、②社会システムとして社会的企業の位置づけや役割の実践的に把握したいと考える。

1 調査方法

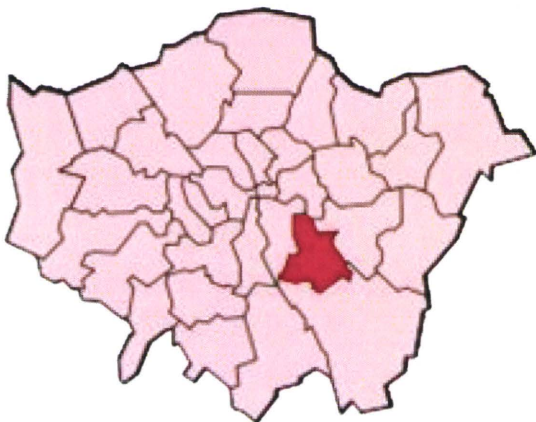
今回の調査対象地の選定にあたっては、同行通訳兼コーディネーターをお願いしたイギリス在住の日本人女性（修士号取得）に協力をいただいた。調査は、2011年秋に実施した。添田、中園の他、元本科研研究分担者の野依智子氏が自身の調査費で参加した。

2 結果

2-1 イギリス版・公的職業安定所 「ジョブセンター・プラス」

ルイシャム区の「ジョブセンター・プラス」を訪れた。同区は、ロンドンの南部に位置し、2008年現在人口は26万1600人である。「ジョブセンター・プラス」では、失業者をカスタマーと呼び、就職への道りをジャーニーと呼ぶ。それぞれの人の段階、仕事を探す、トレーニング、仕事を得るまでの段階を支援する。

失業した人は、ステージ（職を失ってから期間）を分けている。0～12週までは申請の時期と位置づけられ、Jobseeker's Allowanceの申請を行なう。2週間に1回5分程度の面談が行なわれる。半数はこの13週で就職することが出来る。第2ステージは13～26週、毎2週毎面接になる。この他にトレーニングを提供する。第3は26～52週、毎週面接を行ない、ニューディールプログラム（2011年3月終了）の訓練を受ける。アドバイザーが適切な職に連絡する。第4は53～1年以上の段階に別れる。失業半年や1年で密度の濃い支援を行なっている。



参考：ルイシャム区の位置
(ウィキペディアより転載)



写真1：ジョブセンター・プラス外観

18～24才については特別チームを取っている。トレーニングやどういった仕事があるのかを説明する。ひとり親は別のチームを取る。10歳以下子どもがいる場合には、インカムサポート、アドバイスを行なう。

トレーニングは内部で行なうものと外部に委託するものがある。手当を減らすのが目的で、成果で評価している。

Jobseekは働く意志のあり健康な人、Employment Support Allowanceは病気のある人。複雑な手当を単純化したい。来年6月からsingle workプログラムが始まる。

JobseekとEmployment Supportを併せるとルイシャム地区で9,500名がいる。それ以外の手当の受給者は1万2,000人。

現在、「ジョブセンター・プラス」は予算削減の中で成果を出さなければならない。公的トレーニングも委託している。

1対1でサポートを行ない、どんな職種の求人やトレーニングが地域にあるのかを推奨し、アドバイスを行なう。求職者側には義務も生じる。

役所ではパーソナルアドバイザーが十分でないから、さらに外部に委託している。ニューホライズンもその一つである。

1階部分は予約なしで入れる。求人情報はタッチ画面で見られる。2週間に1回は失業の認定がある。手当の申請は、オフィスで確認するが問題があると電話で問い合わせをする。ニュークレームチームがあって、無料ダイヤルで申請、地元の担当者との面会のアポイントメントを取る。

地元の企業は派遣会社や新聞広告を出すのではなく、ジョブセンターへ求人を出してくれるように依頼している。

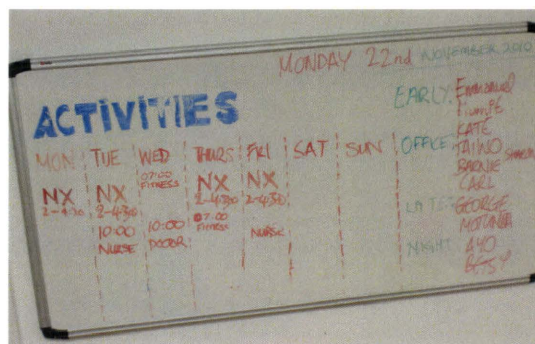


写真3：活動一覧掲示版

2-2 ホームレス支援の社会的企業

「セントマンゴー」

「セントマンゴー」が運営する宿泊型のホームレスの自立支援施設を訪れた。同施設は、オープンして1年半、単身者40人を受け入れている。複雑なニーズをもつ一人一人にあったサービスを提供する。レイシャム地区の病院やストリートレスキュー、テムズリーチ（アウトリーチ）で紹介されて人が来る。朝晩の食事が提供される。1階の27室はトイレとシャワーがついていて、庭に出られる。バルコニー付きの部屋もある。台所は十人で1つをシェアする。



写真2：施設入口



写真4：料理グループ募集の掲示

アセスメントルームが5つあって、ここでレジデントを評価、観察する。結果として専門宿舎、自立向き宿舎を紹介することもある。その後6以降へ移る。ジョブセンターの給付は複雑なので、雇用労働省の説明会を行っている。

料理が出来ない人もいたので、共同キッチンでリビングスキルをあげる。ボランティアの人が入ってクッキングクラブも開かれています。研修としてケータリングコース（8時30分から10時）と衛生（5時30分～7時）もある。

パソコンは5台あってインターネットに接続しているほか、識字学習のトレーニング

グとしても使われている。廊下は吹き抜けで天井が高く、幅も5メートル以上ある。ここには、図書スペースや娯楽用のピンボール台などの設備があり、施設入居者同士の交流の場となるように意図した設計だという。

アセスメントがあつて、いろいろな面を見てスコアを伸ばすように、個人の成長をみるようにする。部屋から出られるようになるとか、仕事の面接に行ける等。

医務室があり、週1回医師の訪問診療がある。ナースは2週回来る。ニートルエクステンジと言って、薬物依存症の人の針を感染症予防のために新しくすることもしている。新しくプライベート住宅、セミインディペンダントの住宅を建設中である。

セントマンゴーはロケーション的に家族や友人と離れてはいるが離れていない距離でアクセスが良い。

住宅地にある施設なので月に1回オープンでイを開いている。寄付の衣類を仕分けや気を植える手伝い、バーバキューをすることもある。なるべく地域とコミュニケーションするように努力している。



写真5：図書スペース



写真6：交流の場ともなる開放的な廊下



写真7：娯楽設備（ピンボール、ビリヤード）

3-3 就労支援に取り組む社会的企業

「ニューホライズン」

ルイシャム地区等ロンドンの南部4つの地区を担当している。障害やメンヘルで働いていない人を対象としている。ジョブセンターは健康な人を対象として、健康等の理由で働けない人をホライズンでは対象とする。病院から来る人もいる。長期の病気で働いたことがない、ジョブセンターに来たことない人が対象である。

サービスの特徴は1対1のサポートを家の近くで受けられるようにすること。これにより安心感を与える。メンタルヘル스에不安を抱える人には別チームで対応する。最初の

面談は30分、次5分、次5分というように必要な時間を対応する。

犯罪を起こした人やメンタルヘルスに不安を抱える人は長期のツアー（求職期間）となる。施設利用者の半数から70%の人が該当する。マッチングとともに辞めないようにアドバイスをする。就職した後も月1回サポート必要ないか確認する。



写真：7 「ツイン」外観

スタッフのジルさん

5年前まで市民相談のシニアマネージャーで勤めていたが、ストレスで鬱病になり退職し、2年間働けなかった。医者にはイザベルさんのところに行けと言われてきた。来て、実際に分かってもらった。自信を持たせてくれた。そこからボランティアポジションで採用された。

今はルイシャムカレッジでメンタルヘルスに不安を抱えた女性を中心にしたコースで勉強をしている。

ひとり親は20人いたら20人が違った要求をもっている。人を尊重して体操する。クリエイティブラーニングによって一人一人対応し、理解、交流を高め、ワークショップに来たいというようにする。



写真8：参加者の名前を星形で掲示

3-4 語学専門学校と就労支援の両部門をもつ団体「ツイン」

ツインは、ロンドン市内に4カ所の学校を持つ団体である。2001年に学校の3階部分がオープン、2006年にフロアを拡張した。

Twinには2つの事業がある。1つ目は政府資金を使った失業者7,500人に対するトレーニングである。もう1つはインターナショナルな英語のサマーセミナーである。

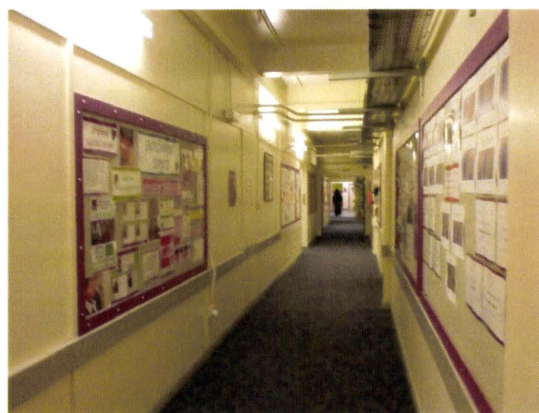


写真8：施設内

1,056のトレーニングコースがあり、720人が雇用されている。1,200の vocational qualification が取れる。政府資金の事業では16のプロジェクトが稼働しており、ひとり親、病気で働けない人、アウトリーチの必要な学生を対象としている。

連携している企業を通じて、適した人をトレーニングして就職されている。教育や建設、ショップが多い。働いた後のケアも行なう。

コース別に single Work Program を行なっているが、手当の方針の変更がある。3世代が働いたことがないという家庭もあり、そういう場合は一緒にトレーニングを行ない働かないサイクルを断ち切る。」

トレーニングプロバイダーには就職して半年から1年するとお金が出る。イギリスの9つの地域で2万3千社と提携している。HSBC（イギリスの銀行）やヒルトン、ハロッズもその1つである。

インターナショナルスクールでは70カ国の5万6千人の学生を受け入れており、英語＋体験ツアー、地元の機関で英語を学ぶ、大学に必要なレベルの英語を学ぶ等様々なレベルを行なっている。

ジョブトレーニングを行なったきっかけは、企業としてのリスク分散である。

どのコースでも就職のスキルについて共通なのは、CB（履歴書）の書き方、コミュニケーション、ヘルス&セーフティである。CBビルダー（職務経歴の書き方）も行なう。

ジョブトレーニングはロンドンだけで4億£の予算が付き、6企業が入札で2地域を争う。そうなった場合は現在補助金が出ている800団体が6つに再編される。これはリスクを軽減するため。就職してからお金が出るので成果が必要。もし、契約が取れるならサ

ブコントラクトしたい。障害やメンヘル、長期失業者のスペシャリストに協力してもらいたい。公務員50万人削減されることもあり、仕事が増えるようにしてほしい。

3 おわりにかえて

本稿では、イギリス調査のうちルイシャム地区の実践を紹介した一次報告である。今回の訪問では、演劇活動による自己表現を活用したホームレス支援を行っている「カーホード・シチズン」、ムスリム系女性の自立支援を社会的企業「アカウント3」、リサイクル業による自立支援を行う「トラック2000」などの興味深い実践にふれることができた。それらについては、次回の最終報告書に掲載することにする。

なお、政権交代により、イギリスの就労自立政策は大きな転換期を迎えている。ツインの聞き取りによれば、今後、経営的に安定した「大手」の社会的企業しか生き残れない時代が到来するという。こうした動向も含めつつ、分析を行いたい。

Ⅲ 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
中園桐代	母子家庭の母の当事者団体における就業支援の意味—札幌市母子寡婦福祉連合会を事例として—	釧路公立大学地域研究	第19号	17-38頁	2010年12月
中園桐代	釧路市自立プログラムの成果と課題	釧路公立大学紀要社会科学研究	第23号	1-19頁	2011年3月
添田祥史	生活保護受給者の生活現実と就労自立支援プログラム	釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要	第42号	33-39頁	2010年12月
成澤弘明・ 添田 祥史	自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察—冬月荘「Zっと! Scrum」を事例として—	北海道教育大学紀要(教育科学編)	第61巻 第2号	49-60頁	

その他

発表者氏名	報告書タイトル名	総ページ数	出版年
釧路市自立支プログラム・評価と改善に向けたワーキンググループ (添田祥史、中園桐代はメンバー。 起草作業の中心的役割を添田が担当)	釧路市自立支援プログラムのさらなる飛躍を求めて		2011年5月

IV 研究成果の刊行物・別冊

母子家庭の母の当事者団体における就業支援の意味

—札幌市母子寡婦福祉連合会を事例として—

中 園 桐 代

2010年12月

母子家庭の母の当事者団体における就業支援の意味¹

— 札幌市母子寡婦福祉連合会を事例として —

中園 桐代

目次

0 問題意識	3 職業紹介事業から母子家庭等就労支援センターへ
1 札幌市の就労支援	4 子育て支援
2 職業能力開発	5 まとめ

0 問題意識

母子家庭の母の就業状況が厳しい事はすでに様々な調査から明らかであり、政策的にも支援策が打ち出されている。その一方で、母子家庭の母を生活保護や児童扶養手当²に頼った「ウェルフェア・マザー」と見る風潮も強い。双方の母子家庭の母への視線は全く反対の物のように見えるが、その根底には共通のものが感じられる。それは、母子家庭を福祉の対象としてとらえるパターン的な視線である。

この論文を執筆しようと思ったきっかけは、このような「福祉の対象」としてのみ母子家庭の母をとらえるのは、実態を正しく認識していないのではないかと感じたからである。個人的に2009年と10年に行なわれたに東北・北海道地区母子寡婦福祉研究集会参加した。そこでは、500人、700人以上の母子家庭の母が集い、就労への努力、子育てと仕事の両立の難しさ、行政への要望を熱く語っていた。このようなパワーをもった組織的な活動を目にして、母子家庭の母を単なる「福祉の対象」としてのみとらえるのは、正しい認識とはいえないのではないかと思ったのである。

加えて母子家庭の母の組織に関する研究は行なわれていない³。私もそうであるが、児童扶養手当制度の改変に伴う就業支援については研究が行われているが、その施策のさきがけとなっている団体の評価は行われていない。

以上のような、問題意識からこの論文では、札幌市母子寡婦福祉連合会（以下、札幌母連）が歴史的にどのような活動を行ってきたか、その中でも就労支援、就業支援のための職業訓練、子育て支援を検討し、その成果について検討する。

札幌母連を事例として取り上げるのは以下の理由からである。第一に表1、2に見るように寡婦⁴が多い母子寡婦福祉団体の中で、札幌母連は子育て中の母子家庭の母が多い組織である。全国的にみ

れば母子家庭になった理由は、死別が1983年の36%から2006年には10%に減少する一方、離婚は49%から80%に上がった⁵。「札幌市ひとり親家庭の生活と意識に関するアンケート」(2007年)によると、札幌市の児童扶養手当受給者は約19千世帯で、9割が離婚、7.5%が未婚によるものである。このように近年、離婚母子家庭が増える中で彼女等を支えている当事者団体であるといえる。

表1 東北・北海道地区の母子寡婦福祉連合会の会員数

		母子部		若年寡婦		寡婦		合計 人数
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	
社会福祉法人 北海道母子寡婦福祉連合会	2009年4月	1076	27.8%	500	12.9%	2300	59.3%	3876
	2010年4月	320	8.5%	800	21.3%	2641	70.2%	3761
財団法人 青森県母子寡婦福祉連合会	2009年4月	248	12.7%	-	-	1701	87.3%	1949
	2010年4月	215	12.0%	-	-	1573	88.0%	1788
財団法人 宮城県母子寡婦福祉連合会	2009年4月	378	15.6%	-	-	2046	84.4%	2424
	2010年4月	482	20.7%	-	-	1851	79.3%	2333
社会福祉法人 秋田県母子寡婦福祉連合会	2009年4月	357	17.8%	-	-	1647	82.2%	2004
	2010年4月	333	17.6%	-	-	1562	82.4%	1895
財団法人 山形県母子寡婦福祉連合会	2009年4月	314	29.6%	420	39.5%	328	30.9%	1062
	2010年4月	219	25.5%	366	42.6%	275	32.0%	860
社団法人 札幌市母子寡婦福祉連合会	2009年4月	728	60.9%	-	-	468	39.1%	1196
	2010年4月	717	59.6%	-	-	487	40.4%	1204

(2010年度 東北・北海道地区母子部長会議資料より作成)
*母子部は20歳未満の子どもがいる者、北海道の若年寡婦は65歳未満、山形は70歳未満の者

表2 札幌連の会員数

年度	総会員数	母子会員		寡婦会員	
		人数	割合	人数	割合
1993	1,280	794	62.0%	486	38.0%
1994	1,253	677	54.0%	576	46.0%
1995	1,298	687	52.9%	611	47.1%
1996	1,320	700	53.0%	620	47.0%
1997	1,275	678	53.2%	597	46.8%
1998	1,309	695	53.1%	614	46.9%
1999	1,299	722	55.6%	577	44.4%
2,000	1,347	769	57.1%	578	42.9%
2,001	1,409	832	59.0%	577	41.0%
2,002	1,443	867	60.1%	576	39.9%
2,003	1,350	836	61.9%	514	38.1%
2,004	1,363	835	61.3%	528	38.7%
2,005	1,291	780	60.4%	511	39.6%
2,006	1,223	719	58.8%	504	41.2%
2,007	1,193	721	60.4%	472	39.6%
2,008	1,194	702	58.8%	492	41.2%
2,009	1,196	728	60.9%	468	39.1%

(事務局資料より作成)

第二に歴史的に見ても様々な事業を展開し、その中で母の就業支援を札母連結成当時から積極的に行なっている点である。2010年現在、生活支援事業、調査研修事業、広報活動事業、児童の健全育成講座事業、奨学金給付事業、会員の交流事業、貸付金事業、就労対策事業、売店事業、そして指定管理業者として、札幌市母子寡婦福祉センター事業、母子生活支援施設札幌市しらぎく荘管理運営を行なっている。

調査は2009～10年にかけて札母連事務局、理事長等に5回にわたってインタビューを行なった。また、事務局からは総会資料を始めとする様々な資料を頂いた。この場をかりてお礼を申し上げる。

1 札母連の就労支援

1-1 札母連結成以前の仕事作りと政策要求

札母連は1959年に結成されるが、その前から戦後全国的に戦争未亡人とその子どもの福祉や経済自立を求める活動が行われていた。特に山高しげりを中心とする全国未亡人団体協議会（以下、全未協）は、1950年の結成大会で次のような決議をあげている⁶。

- 一 政府並びに国会に対して社会保障制度勧告中に含まれた母子年金等の速やかなる実施を要望する。
- 二 中央及び地方における授職、育英、住居等母子福祉に関する公私施設の拡充を要望する。
- 三 新聞、雑誌、ラジオ等報道機関に対し、未亡人問題に関する取扱の伸張公正を要望する。

この運動を受けて1952年には母子福祉資金貸付等に関する法律案が国会で可決され、貸付制度が整備される。彼女たちは児童扶養手当や母子家庭の母の年金問題への取り組みを進め、国会での立法、可決を進めた。

これらの政治的な要望を出すばかりでなく、地域では母と子どもが生活していくための就労の場が各地でつくられた。1948年に戦争未亡人である母子家庭の貧困を解決するべく鯉淵鉦子を中心として結成された未葦会（茨城県水海道町）は、袋貼り等の授産所づくり、食堂の経営、和裁、編み物、レース編みの内職の斡旋を行なっていた⁷。また、同じ頃滋賀県大津市で大津市未亡人会を結成した守田厚子も、下駄作りと販売、袋貼りや電気部品製作の内職、競輪場内での食堂経営、市役所内での食堂経営を行なっていた⁸。このような活動は各地で行なわれた。彼女等のモットーは全未協⁹のモットーである「我が幸は我が手で」であった。つまり、パターン的な福祉の対象であるだけでなく、母子家庭の母たち自らが決して女性が外に出て働く事に寛容ではなかった社会状況の中で、みずから地域の中で就労の場を創出し自立を求めた。このような活動は戦後各地で行なわれた。

1-2 札母連の就労支援

札母連の活動をまとめたのが表3である。1950年の全未協の結成には北海道からも代表が2名出席している。